題　目　河川におけるポイ捨て抑止のための社会実験：パブリックアートによる介入効果

氏　名　結城　心太朗

指導教員　大沼　進

プラスチックの海洋流出が深刻化している。河川からのごみの流出を止めるため、河川沿いでのポイ捨て抑止策の検討が行われてきた。本研究は札幌市北区にある安春川流域を対象として、地域と協働しながらポイ捨てを抑止する介入実験を行うためのアクションリサーチを行った。実践可能なポイ捨て抑止策の検討のため、アクションリサーチの考え方に立ち、現場の人々や組織と協力し、彼らとともに現場の状況や現場が抱える問題を踏まえて進めた。予備調査では、現場観察と聞き取り調査を主としながら、地域団体や行政、NPO 法人とともに安春川流域のポイ捨て問題とその対策を検討した。予備調査の結果、安春川上流部では親水の場が整備され、遊歩道の歩行者によるポイ捨てが見られた。また、安春川上流部では特に地域団体の多様な活動が見られ、地域住民が川に対して愛着を持っていた。したがって、本調査に向けて地域団体の子どもたちが描いた絵をパブリックアートとして安春川上流部の東屋に設置することを提案した。地域団体の活動を阻害せず、彼らの懸念点を汲み取り、意向に沿うように介入実験を実施した。本調査ではパブリックアート設置の介入実験によりポイ捨て抑制効果を検証した。安春川沿いに介入物設置エリア 2 箇所と非設置エリア 2 箇所を設け、介入物設置前、設置中、設置後の 3 期間で計 8 週間にわたり、ポイ捨ての数、ポイ捨ての位置、通行人数を計測した。調査エリアにおけるポイ捨てに関わる状況を包括的に追跡した。また、ポイ捨ての位置の記録から、どのような場所にごみが捨てられやすく、とどまりやすいかを可視化した。本調査の結果、エリア間の差が大きかったためエリア別に検討した。1 つのエリアではパブリックアート設置の効果は見られ介入期間中にポイ捨てが減少したが、もう一つの地点では効果が見られなかった。パブリックアートの効果は限定的であり、あらかじめ人がよく訪れ、人目につきやすい場所に掲示されることと、掲示される場所がある程度整備されていることという 2 つの条件下ではポイ捨て抑制効果を持ったと考えられた。安春川の地域固有のポイ捨ての状況から、歩行者が意図せずに落としたごみが人目につきにくい場所に溜まっていくプロセスを推察した。本研究は、地域の実態を把握し、地域と協働するアクションリサーチを各地で積み重ねていく方法を検討する上で貢献する好事例を提供した。